

佐賀小学校6年生「紙漉きで卒業証書づくり」

佐賀小学校の6年生児童が、2月13日に、町内の楮栽培農家で紙漉き職人でもある中嶋久実子さん（天然和紙ハレハレ本舗）の作業場で3月卒業式に受け取る卒業証書を紙漉きしました。

復活した紙漉きでの卒業証書づくり

同小学校では、昭和60年から平成元年頃までの間、旧佐賀町の地元の方に協力を得て、自生する楮を蒸し剥ぎし紙漉きでの卒業証書づくりが行われていました。当時、紙漉きを体験した保護者らが「自分



たちの子どもにも小学校最後の思い出づくりをさせてあげたい。同じように紙漉きでの卒業証書づくりを体験させてあげたい」という思いで学校に提案し、昨年からは、佐賀小学校6年生が行う紙漉きでの卒業証書づくりが復活しました。

今年の6年生は、4学年の総合的な学習「二分の一人式」の中で、同じく中嶋さんを講師に、楮の蒸し剥ぎとメッセージカードの紙漉きを体験しています。

「この卒業証書づくりが昨年復活して、今度は卒業証書を紙漉きで作れることを、とても喜び、楽しみにしていたようです」と、担任の岩井圭先生は教えてくれました。

若山楮で卒業証書づくり

今年も、佐賀北部地域で若山楮の栽培を復活させたこともあり、中嶋さんもメンバーとして所属する佐賀北部地域協議会（会長矢野元）にも協力を得て、昨年12月には拳ノ川地区の作業場で若山楮の蒸し作業の様子を見学したり、同協議会メンバーや地域内外



から訪れた方々といっしょにぎやかに蒸し剥ぎ作業を行うこともできました。

「佐賀地区には明治から昭和初期にかけて全国的にも良質と評価される楮があちこちで栽培されていて、特にこの拳ノ川若山の若山楮は高価な値段で売買されていたんですよ」と中嶋さんの説明に子どもたちも同伴した保護者の方々も大変驚いている様子でした。

2年前に蒸し剥ぎを経験済みの子どもたちは、手慣れた様子で次々と作業を進めていきました。「今回は皮剥ぎはせんが？」と、余裕の会話も聞こえていたほどです。

紙漉き作業は、23人の児童が5グループに分かれ、それぞれ約1時間かけて1人3枚

の和紙を作りました。

紙を漉くための木枠の中に張った漉き網には、佐賀小学校の校章が浮き上がるように手づくりで模られたフェルトが付けられていました。

蒸し剥ぎの時とは打って変わって、緊張した面持ちの子どもたち「失敗したらどうしよう」「難しそうな」「うまくできたらえいけど」中嶋さんに指導を受けながら、一つ一つの作業を慎重に慎重にゆくりと行う子、思い切りのよい子、「同じ作業でもそれぞれ性格が出ておもしろいね」と中嶋さんも楽しんでるようでした。

地元資源で卒業証書づくりを広めたい

今年、佐賀小学校に加え、伊与喜小学校が同じく12月の蒸し剥ぎとハレハレ本舗作業場で紙漉きでの卒業証書づくりを行い、拳ノ川小学校も紙の博物館（いの町）で紙漉きでの卒業証書づくりを行いました。児童数が少ない伊与喜小学校では全員が体験できまうすが、小学校最後の記念という価値をつけ、子どもたちに

在学中の楽しみにしてもらおうと6年生だけの取り組みとしているそうです。

佐賀小学校6年生児童の保護者代表の浜岡佳香さんは「子どもたちにとって思い出の体験と品になる紙漉きの卒業証書づくりが町内の他の小学校にも広まってほしい」、中嶋さんは「黒潮町の数ある特産品の中で和紙の素材になるものはたくさんあるけれど、やっぱり佐賀地域では若山楮で、大方地域ではサトウキビを素材とした卒業証書づくりを子どもたちにさせてあげられたら」と話してくれました。

豊かな地域資源に加え、蒸し剥ぎも、紙漉きも行える環境にある黒潮町で、来年の紙漉き卒業証書づくりがどんな形で行われるかが大変楽しみになりました。

